

5.日露戦争末期の満洲軍総司令部ならびに第一軍作製の野戦用図：解説と目録

小林 茂 (大阪大学名誉教授)

これまでの外邦図研究で、私たちは日清・日露戦争期に日本軍が作製した地図に接する機会があれば、できるだけ現物あるいは画像を入手するよう努力してきた。またその一部については、解説と目録を刊行している。その一つが「日露戦争時の戦場で偵察用に作製・使用されたと推定される地図について」(金 2009)で、奉天会戦(1905年2~3月)以後、開原以北で行われたロシア軍との戦闘に際して作製された偵察図を検討した。これはインターネットのオークションで購入したものであったが、他の資料と比較したところ、多くが戦場附近の偵察活動で急いで作られた地形図程度の大縮尺図をもとにしたものであることがわかった。カーボン・コピーや謄写版によって複製・印刷されており、そのなかには「見取図」ということを明記したものもあるが、いずれでも等高線のような曲線を描くだけでなく、大まかな縮尺も示し、本格的な測量によらない地図でも、一定の規定のようなものに従って作製されたことがわかる。作製者が記入されているものをみると、第四軍参謀部(司令官：野津道貫大将、参謀長：上原勇作少将)、あるいはそれに所属する第六師団、第十師団の参謀部となっており、二点だけではあるが個人名と位階を記すものがあり、さらにその一つには所属連隊・中隊名も記入されていた。

このような偵察活動による図以外では、戦闘終了後に戦史用に作られた図も入手している。まず日清戦争期については、遼東半島の主要戦場について作製された2万分の1地形図がある。第一軍(司令官：山縣有朋大将、のち野津道貫大将)や第二軍(司令官：大山巖大将)に随行した陸地測量部の技術者によって作製されたと考えられるもので、鴨緑江の渡河作戦に関連する「九連城近傍圖」(5図幅)に始まり、「鳳凰城近傍圖」(4図幅)、

「太平山近傍圖」(8図幅)、「蓋平近傍圖」(4図幅)、「海城近傍圖」(15図幅)、「旅順口近傍圖」

(6図幅)を確認している(小林 2021)。日露戦争についても、戦史用図のための測量は基本的に2万分の1の縮尺でおもに臨時測図部によって行われ、全部が入手できたわけではないが、「九連城近傍圖」(9図幅+5補足図)、「得利寺近傍」(17図幅)、「大石橋及蓋平近傍圖」(26図幅)、「遼陽近傍圖」(23図幅)について紹介した(小林・小嶋・多田隈・顧 2012)。このうち九連城近傍と大石橋及蓋平については、日清戦争に際しての戦史用2万分の1図(九連城近傍・蓋平近傍・太平山近傍)を改訂増補していることが明らかであり、戦略的要地で戦闘がくり返されて、戦史用図のカバー範囲が拡大したことがわかる。日露戦争に関連する2万分の1戦史用図は、一圖欠落があるが、その後も「鳳凰城近傍圖」(8図幅)、「海城近傍圖」(15図幅)のほか「析木城近傍圖」(10図幅)、「營口近傍圖」(4図幅)を入手しており、次号で概要を報告したい。

戦史用に作られた図については、日露戦争の旅順包囲戦に関連したものも調査してきた(藤森・三崎・中村・鈴江・後藤・小林 2011)。包囲戦終了後に臨時測図部が測量して作図した堡塁や砲台の図で、アメリカ議会図書館の地理・地図部が収蔵しているものである。2009年に開始された大阪大学文学研究科の「多言語多文化研究にむけた複合型派遣プログラム」(日本学術振興会の「組織的な若手研究者派遣プログラム」による)により、ワシントンに派遣された大学院生・学部学生の実習を兼ねて、これらの目録作製と写真撮影を実施した(2010年9月)。

アメリカ議会図書館が収蔵するこれらの図は、第2次世界大戦後に日本に進駐したアメリカ陸軍

によって旧陸地測量部で接収されたものと考えられ、大きく二つに分かれる。一方は旅順の堡塁や砲台の手描き実測図で全 50 枚以上に達する。他方は、印刷された旅順要塞とその周辺部に関する「五千分一旅順要塞近傍圖」で 90 枚以上となる。短期間の作業ではあるが、この全容の把握に努めた。

以上のような作業を通じて、日清・日露戦争に際して作製された地図の一端が分かり始めたところであるが、戦史用地図だけでもかなりの量に達し、戦争の現場で作製された図はさらに多いと推定される。またこれまでの調査で補足できたものが、戦史用図に大きく偏っていることも明らかである。これらは初めから保存を主目的に作られたもので、後世に残りやすく、私たちの視野に入りやすい図とってよいであろう。

本稿では、これに対して、現場の部隊での使用を前提に作製されたと考えられる図を紹介する。日露戦争期に作られた満洲軍総司令部（総司令官：大山巖元帥）と第一軍参謀部（司令官：黒木為楨大将、参謀長：藤井茂少将）による地図群である。このうち第一軍参謀部によるものは、2011 年度に購入していたが、位置づけが容易でなく、2020 年度に購入できた満洲軍総司令部製のものを参照してようやくその特色が理解できるようになった。いずれも上記のような奉天会戦以後に主に作成された図であり、またそのなかにはロシア製図に基づくものが少なくない。またいずれの図も経緯度の記入を欠くだけでなく、それらを補足する図が見られる場合もあり、臨時に作製されたものであったことがあきらかである。本稿のタイトルに「野戦用図」としたように、戦闘部隊が使用することを前提に作られたものと考えられる。

ただし、このうち満洲軍総司令部製の図には折り目や書き込みといった、戦闘の現場での使用をうかがわせるものはなく、未使用とってよいものばかりである。その点から旧蔵者が注目され、これを扱った古書店に尋ねたが、古書市場で調達したもので、その来歴を検討するのは困難である

ことが判明した。他方、第一軍参謀部製の地図には折り目が見られ、なかには 2 枚の図を貼り合わせたものもあるが、傷みはすくなく、戦場で使われたものではないと考えられる。

旧蔵者や来歴については今後の課題とし、以下ではまず満洲軍総司令部製の図に注目し、小縮尺のものから順次大縮尺のものを検討する。つづいてこれに基づきつつ、第一軍参謀部製の図を検討することとしたい。

1. 満洲軍総司令部製の図について

満洲軍総司令部（満洲軍総司令部）は、日露戦争初期に設置された満洲に展開する部隊の指揮に当たる司令部である。この司令部の構成を見ると、陸地測量部から派遣された下士官（井上井）のほか、製図にあたった陸軍技手（山本徳次郎）が初期から配属されており（JACAR [アジア歴史資料センター資料]: C09122015900; C06041121400）、当初から地図関係の業務が予定されていたことがわかる。ただし、測量を行うほどの人員はおらず、従って満洲軍総司令部のこの方面の役割は、地図の編集と製図および印刷であったと考えられる。なお、参謀本部に対する印刷機材の請求が行われており（JACAR: C07082368800）、それから石版印刷のほか謄写版による印刷も行われていたことがわかる。

以下、各縮尺の地図群の検討にはいる前に、それぞれが刊行された時期についてみておきたい

（表 1-1）。図の縮尺は 3 種類に分かれる。そのうち 8 万 4 千分の 1 図は、ロシアの 1 デュイム（1 インチに同じ）で 2 ヴェルスタ（1 ヴェルスタ [露里] = 1.067 キロメートル）を示す図（日本では「二露里図」といわれた）を主な元図とするものとなる。また 42 万分の 1 図は、同様に 1 デュイムで 10 ヴェルスタを示す「十露里図」を主な元図とする。後者のタイトルに「露版」とあるのは、それを明示することになるが、8 万 4 千分の 1 図が「露版」とされていないのは、日本側の情報がかなり加えられていることを示唆する。

表 1-1：日露戦争末期の満洲軍総司令部製図の刊期および縮尺・カバー範囲

図 群	刊行時期	点数	カバー範囲	掲載表
8万4千分の1図A	1905年3月	6	奉天の北に隣接する地域	表 1-5
露版42万分の1図	1905年4月	9	奉天以北の広域	表 1-2
20万分の1図	1905年5～9月	14+補足図3	奉天以北、第二版、第三版もあり	表 1-3
8万4千分の1図B	1905年7～9月	12+補足図5	開原・威遠堡門以北	表 1-6

42万分の1図では、いずれの図幅でもキリル文字による地名の表記を音訳したカタカナ地名が多いが、8万4千分の1図ではこれが少なく、漢字による表記がほとんどである。また日本側の測量によるとみられる補足図もあり、もはやこれらについて「露版」と表記するのがためらわれるほどになっていたことがうかがわれる。これに対して、20万分の1図については、あきらかに日本軍の編集によるもので、ロシア製図からの情報の占める割合は、さらに少ないと推定される。

これらの縮尺の図は、いずれも奉天以北を図示し、奉天会戦以後の、日露戦争末期の戦闘の展開に関連する。また8万4千分の1図が大きく二つのグループに分かれるのは、その元図となったロシア製図の入手が大きく二つの時期に分かれたことを示唆し、それについてはこの二つの図群の関係を検討する際に言及することとしたい。

(1) 「露版四十二万分一圖」

いずれも広域を示す図で、9枚の図がカバーする範囲が西は東経123度付近から東は同131度付近に、南は北緯42度付近から北は同46度付近に及ぶ。これだけ広域を示すのに経緯度が示されない背景の理解に苦しむが、それはロシア製図に経緯度が示されないということを意味しない。アメリカ議会図書館が収蔵する奉天省の16万8千分の1図（四露里図、そのリストのタイトルは、*Sborn'ij list" maršrutnoj kart'i Mikudenskoj*

provincii、1901-1902g. [奉天省行軍路図1901-1902年])では(図1-1)、この「露版四十二万分一圖」よりやや狭い範囲をカバーするが、経緯度が示されている。また別途購入した同じ範囲を図示する84万分の1図（二十露里図、タイトルは *Karta južnoj Man'čžurij: Mukudenskaja provincija i Kvantunskaja Oblast'*、1903年刊、2枚組[南部満州図：奉天省と関東州])でも経緯度を明示する。こうした点からすれば、もとのロシア製図にあった経緯度が、満洲軍総司令部によって意識的に省略されたとみるべきであろう。

なおこれらの図のカバーする範囲では、空白域がめだち、ロシア側でも東清鉄道沿線や主要交通路沿い測量が限られていたことがうかがわれる(図1-2a,b)。また上記のように、地名にはカタカナ表記がめだつ。この図群が作製された時期には、日本軍の進撃が始まったところで、ロシア製図に記載された、現地の地名のキリル文字による音訳表記から漢字を推定することは容易でなかったことが明らかである。漢字表記が主要な中心地や東清鉄道の駅名に限られることになったのは、当然の結果と考えられる。

ところで、図1-1に示した地域は、図1-2bと同じ地域を図示している。東清鉄道南区線の鐵嶺付近である。縮尺のちがいにもかかわらず、地名が記入されるのは鉄道や主要道路沿線にかぎられる点が共通している。

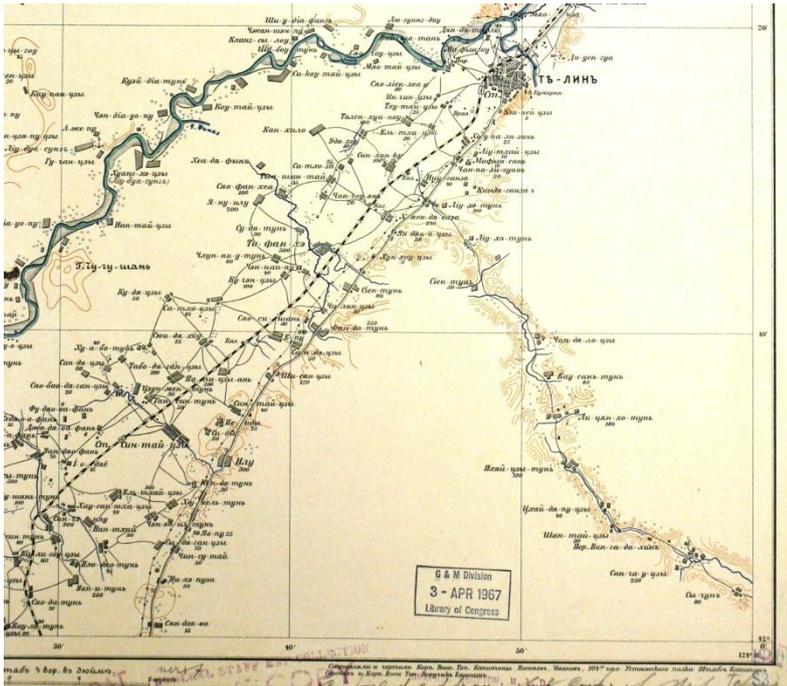


図 1-1：ロシア製「奉天省行軍路図」(1901-1902年)の鐵嶺付近(図郭右下には東経124度、北緯42度と示し、10分毎に経緯線を記入)



図 1-2a：露版四十二万分一圖「鐵嶺」図幅右上(中央に伊通城)

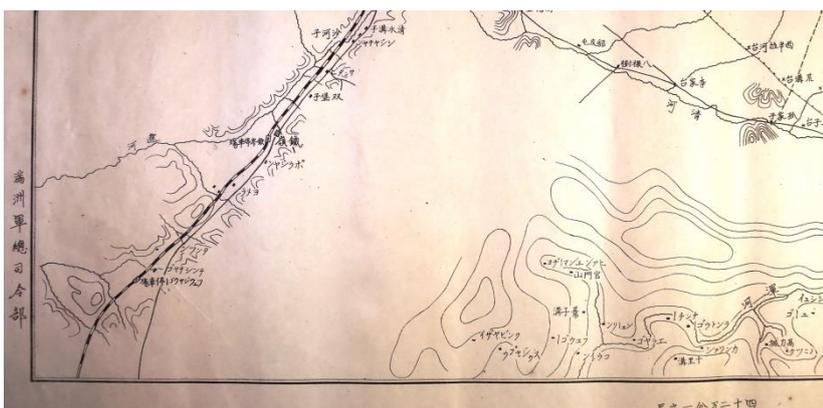


図 1-1b：露版四十二万分一圖「鐵嶺」図幅左下(中央左寄りの鉄道線路沿いの集落が鐵嶺)

なお、表 1-2 および図 1-3 に示すように、この図群のカバー範囲の北端がハルビン付近となっているのは、日露戦争に際して日本側の想定した戦場の範囲がこの付近までであったことをうかがわせる。ただし、伯都訥図幅、哈爾賓図幅、横道河

子図幅の北側の図郭にはそれに接続する図幅の名称を示しており(伯都訥図幅の場合は、齊齊哈爾と呼蘭城、哈爾賓図幅の場合は呼蘭城と巴彦蘇蘇、横道河子図幅の場合は巴彦蘇蘇とフグジン)、さらに探索をつづける必要がある。

表 1-2：「露版四十二万分一圖」の目録

番号	タイトル	刊期	刊行機関	サイズ(cm)	備考
1	伯都訥	1905 年 4 月	滿洲軍總司令部	46.3×58.3	裏に「祕」朱印
2	哈爾賓	1905 年 4 月	滿洲軍總司令部	46.1×58.2	ハルビン、裏に「祕」朱印
3	横道河子	1905 年 4 月	滿洲軍總司令部	46.1×58.0	裏に「祕」朱印
4	寛城子	1905 年 4 月	滿洲軍總司令部	46.2×58.2	長春、裏に「祕」朱印
5	吉林	1905 年 4 月	滿洲軍總司令部	46.2×58.2	裏に「祕」朱印
6	寧古塔	1905 年 4 月	滿洲軍總司令部	46.0×58.0	裏に「祕」朱印
7	鐵嶺	1905 年 4 月	滿洲軍總司令部	46.0×58.2	裏に「祕」朱印
8	朝陽城	1905 年 4 月	滿洲軍總司令部	46.1×58.0	裏に「祕」朱印
9	琿春	1905 年 4 月	滿洲軍總司令部	46.2×57.8	裏に「祕」朱印

注(1)：図には経緯度が示されていない。

(2)：北方を図示するものから配列している。また同じ緯度の場合は西側のものほど上に配列している。

伯都訥	哈爾賓	横道家子
寛城子	吉 林	寧古塔
鐵 嶺	朝陽城	琿 春

図 1-3：露版四十二万分一圖の接合関係

(2) 滿洲軍總司令部製 20 万分 1 図

ロシア軍の作製した地図には 20 万分の 1 の縮尺のものではなく、この図群は日本側の編集によって作製されたと考えられやすいが、上記のアメリカ議会図書館蔵のロシア製 16 万 8 千分の 1 図の各図郭は、東西が経度 1 度、南北が緯度 40 分となっているだけでなく、各図郭を区切る経緯度も日本陸軍が 1880 年代から準備してきた「清國二十万分一圖」と同じである。これが偶然の一致なのか、先行した日本製図の影響なのかを知ることは容易なことではないが、この滿洲軍總司令部製の図の検討にあたって、まず「清國二十万分一圖」の概要を紹介するとともに、そのロシア製 16 万 8 千分の 1 図との関係について触れておかねばならない。

「清國二十万分一圖」は、小林ほか (2017) で詳しく検討したように、1880 年代の陸軍の若手将校 (参謀本部出仕) の旅行によるコンパス

と歩測によるトラバース測量の成果を主なデータとしている。それが日清戦争までに集約され、中国大陸北部と滿洲南部について図 1-4 (「清國二十万分一圖一覽表」1894 年 9 月製版より) に示すような図群が準備された。ただし広大なこの地域に派遣された将校は少なく、できあがった地図は、主要都市とその間の交通路を主体とするもので、空白部分が多い。点と線の地図といってもよい。また各図幅の四隅には経緯度が記入されるが、それらは英国海図や欧米人の測量成果をもとにしたものであった。日清戦争以後このカバー範囲はさらに拡大されて、図 1-5 に示すようなものとなった。図 1-4 に見られる北限は「奉天府」図幅のように北緯 42 度までであるが、「長春廳」や「吉林府」図幅のように 44 度まで北上する。またこの東方の「甯古塔」図幅の北限は 44 度 40 分に達することとなる。図 4 に示された図は、そのタイトルにみられるようにやはり「清國二十万分一圖」と位置づけられ、各図に付された番号も図 3 にみられるものを踏襲しつつ付されている。

残念ながら、このあらたに作図された部分の図幅がどのように準備されたか、さらにはどのような資料をもとにしているかについてわかることは少ない。1884 年に参謀本部出仕の将校倉

辻靖二郎が駐在地の牛荘から寧古塔に旅行し、そこで清国の官憲に逮捕されることとなったが（小林ほか 2017: 84-85）、その作製したルート図は没収されなかったのか、アメリカ議会図書館で見ることができ、この一部を小林編（2017）の口絵写真3として掲載している（「從三道嶺至甯古塔城路上図」10 万分の 1）。この口絵写真にもみえている方眼状に描きこまれた直線は、倉辻作製の原図から 20 万分の 1 図を作製する

際に、誤差補正用に記入されたものである可能性が大きく、それが「甯古塔」図幅を準備する際に利用されたことに疑問の余地はない。これ以後どのような測量が行われたかについては資料を発見しておらず、不明な点が多いが、この地域での日本軍将校の測量の密度は極めて低いと考えられ、文字通りの点と線の図にならざるをえなかったと考えられる。

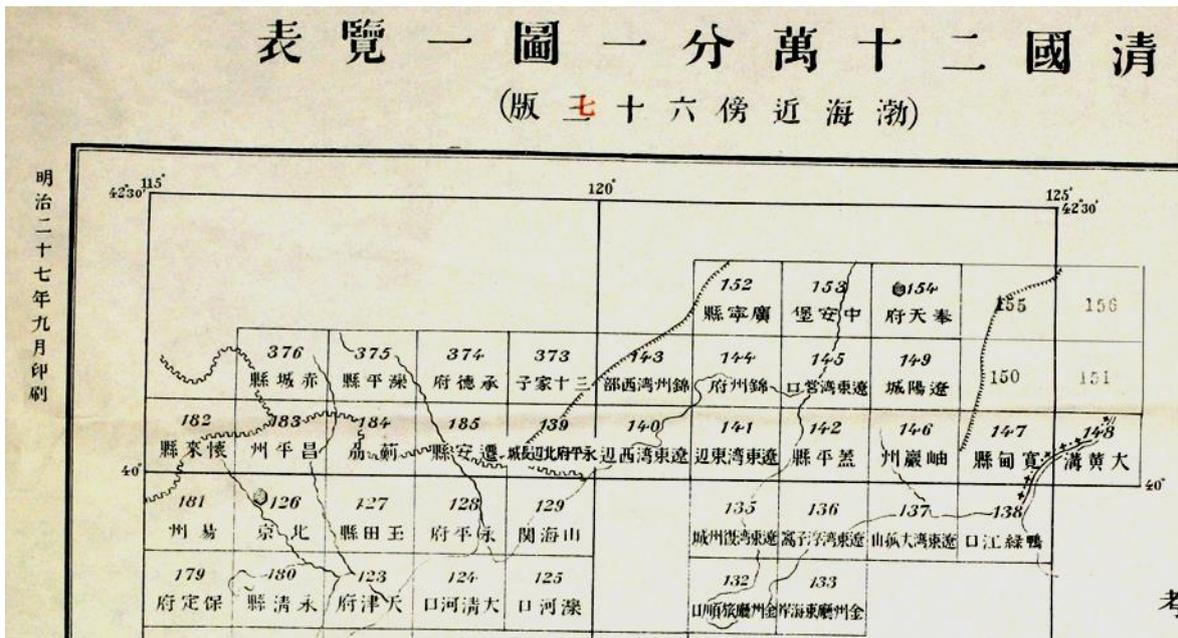


図 1-4 「清國二十萬分一圖一覽表」（1894 年 9 月製版後一部修正、アメリカ議会図書館蔵）の北部

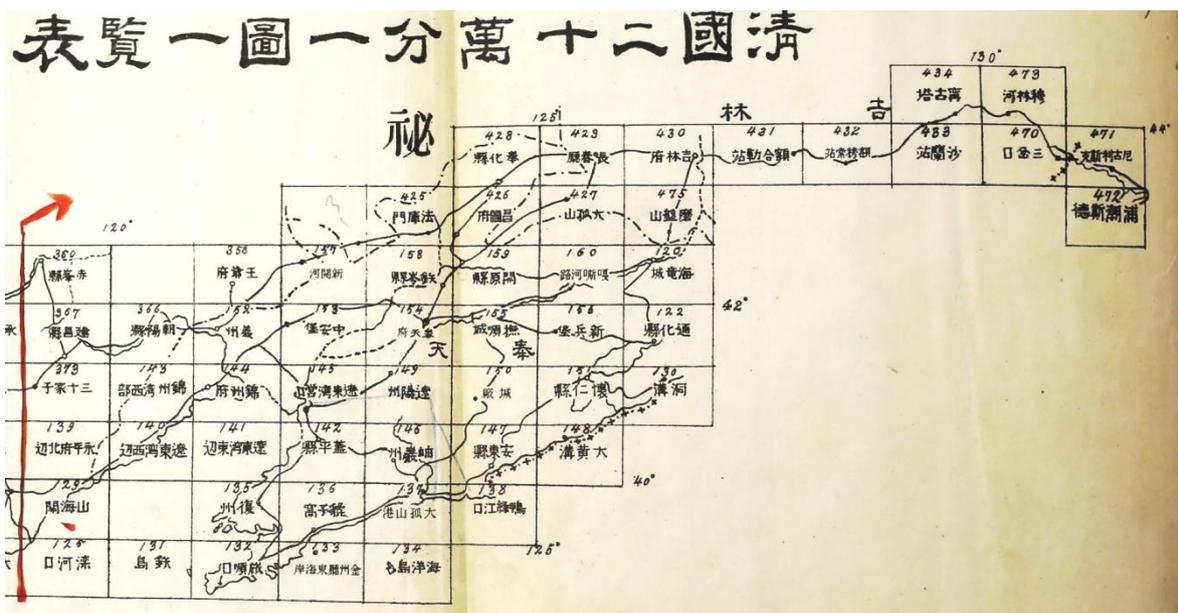


図 1-5 : 「清國二十萬分一圖一覽表」（1904 年 3 月 8 日、JACAR: C06040589100）の中央部と東部

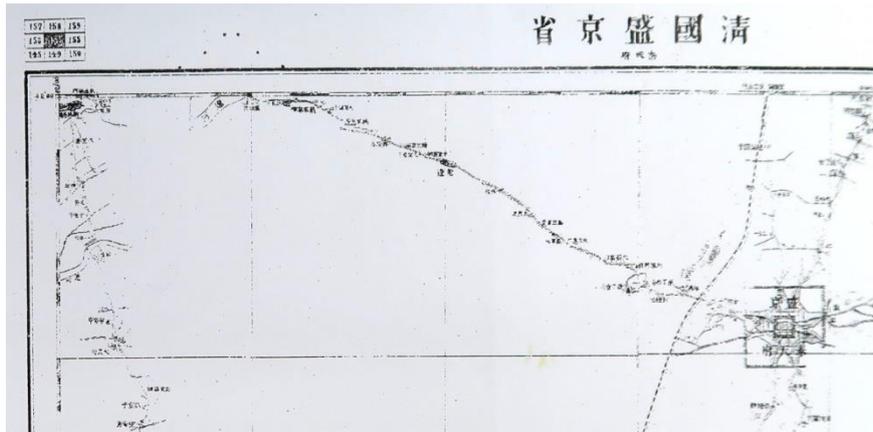


図 1-6：清國二十万分一圖 154 号「(清國盛京省)奉天府」図幅（東清鉄道南部支線を補入）

(JACAR: C13010149000)

これに関連して言及しておかねばならないのは、この清國二十万分一圖については、「甯古塔」図幅だけでなく、その他の図幅についてもまだ実物や画像を見る機会がない。図 1-4 に示された 20 万分の 1 図については、国外ではアメリカ議会図書館をはじめとして、国内でも大阪大学などに収蔵の例があるが、今後意識して探索をつづけたい。

さて日露戦争が開始されると、このような清國二十万分一圖では、あきらかに不十分と考えられたらしく、1904 年 3 月 18 日には、日清戦争期に臨時測図部（第 1 次）の測量によって作製された「遼東半島五万分一圖」を縮写して 20 万分の 1 図として印刷することが指令された（JACAR: C06040589100）。遼東半島五万分一圖のカバー範囲は、当然のことながら日清戦争で戦場になった地域が主体で、その南部に限られることとなった。この縮写作業が反映された清國二十万分一圖では、図のタイトルも変更された場合が多いが、それによると考えられる図は現物がほとんどみつかっていない。アジア歴史資料センターの小山史料（JACAR: C13010148900）にみられる清國二十万分一圖 153 号の「(清國盛京省) 新民屯」図幅（1904 年製版）および同 154 号の「(清國盛京省) 奉天府」図幅（刊期を記入しない）は、それにあたるものとみられる。153 号図幅は図 1-4 と図

1-5 では、「中安堡」とされており、「新民屯」は新名である。他方 154 号(図 1-6)では、刊期が示されず、タイトルも変わらないが、旧来の図に東清鉄道南部支線が加筆されている。ロシアはこの南部支線の敷設権を 1898 年 6 月に獲得し、1902 年にはこの図に見られる部分は営業を開始していた（竹中 2011, 筆者不詳 1902）。それ以後の作製と考えてよいであろう。

1904 年 5 月 1 日から鴨緑江渡河作戦が開始され、それに際して戦死したロシア軍将校の所持品から発見された多数の地形図は、日本軍の地図事情を一変させた（小林 2011: 122-125; 2020）。この 8 万 4 千分の 1 図は、上記の遼東半島五万分一圖のカバーする地域の北端から北側を図示しているところから、それを 5 万分の 1 図に伸写する指示が出たようで、早くも 5 月 27 日に「露版遼東半島五万分一圖」を前線部隊に配布している（JACAR: C07082277600）。また 5 月 25 日頃にはこうした 8 万 4 千分の 1 図を 20 万分の 1 に縮写することが指示された（JACAR: C07082277200）。これは四隅に経緯度を記入した色刷りの「東亞二十万分一圖」として、145 号「海城」・146 号「鳳凰城」・147 号「義州」・149 号「遼陽」の 4 図幅として刊行された（国立国会図書館蔵 YG837-650~653、アジア歴史資料センター小山史料でも「海城」・「遼陽」図幅が参照可能 [JACAR:

C13010148800])). これらの図幅の番号は、清國二十万分一圖の番号を継承しているが、名称については変化が見られた。表 1-4 に見られる旧名は、「海城」図幅の場合は「遼東湾営口」、「鳳凰城」の場合は「岫巖州」。「義州」の場合は「安東県」、「遼陽」の場合は「遼陽州」である。これらに加えて後述の「奉天」図幅の位置関係を示すのが図 1-7 である。

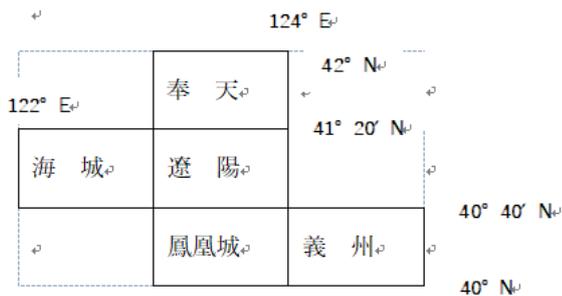


図 1-7：東亞二十万分一圖の接合関係

この 4 図幅の一部がロシア製図をもとにすることは、地名のカタカナ表記から容易に知ることができる。「鳳凰城」・「義州」図幅の北縁、「海城」・「遼陽」図幅では図の中央部にもそうした地名がみられる。他方、空白部は少なくなって、清國二十萬分一圖の水準を大きく超えたものとなった。この刊行時期は、6 月 13 日頃と考えられ (JACAR: C07082283900)、急いで編集・製図・印刷が行われたと考えられる。なお、これらの作業は陸地測量部で行われた可能性が高い。

「東亞二十万分一圖」と明記された図はこのほか 154 号の「奉天」図幅がある (大阪大学蔵、満洲軍総司令部製、旧名は「奉天府」[図 1-4])。ただし、1904 年 10 月製版とされたこの図の右肩には「修正補足」という記入があり、最初の版はもっと早く 8 月 5 日以前に刊行された可能性がある (JACAR: C07082304300)。色刷りではないが、やはり四隅に経緯度を記入する。また清國二十萬分一圖の「奉天」図幅と比較すると、中心都市の奉天の位置が大きく西南方向に移っている (図 1-8)。同じような傾向は「遼陽」図幅についてもみとめられ、清國二十萬分一圖

の示す経緯度、とくに経度については、大きな問題があったことがあきらかである。ロシア製図はこれに対して本格的な経緯度測量を行っており (小林 2011: 109-119)、その成果を取り入れることによって、「東亞二十万分一圖」は本格的な近代地図に大きく近づくこととなった。

このような修正に際して、ロシア製の上記「奉天省行軍路図 1901-1902 年」(16 万 8 千分の 1) が参照されたかどうかに関連して注目される。日本製の図にみられるカタカナで記入された地名が「奉天省行軍路図 1901-1902 年」の対応図幅に見られる場合もあるが、そうでない場合も多く、また対応する地点が見つからない場合もあって、別のロシア製図が参照された可能性が高い。とくに「海城」図幅については、その空白部を考慮すると、全く別の図を参照したと考えられる。

以上に関連して留意しておかねばならないのは、これらの「東亞二十万分一圖」がいずれもメルカトル図法によると考えられる点である。これに対してロシア側の地図は、基本的に円錐図法によると推定される。上記の「奉天省行軍路図 1901-1902 年」(16 万 8 千分の 1) や「南部満州図：奉天省と関東州」(84 万分の 1、大阪大学蔵)、さらに Karta Daljnjago Vostoka (「極東図」、42 万分の 1、1903 年刊、アメリカ議会図書館蔵、遼東半島と朝鮮半島北部および中部を図示) はいずれも円錐図法によることがわかる。Karta Severnoj Korei (84 万分の 1、1903 年刊、アメリカ議会図書館蔵 [金窪 2010: 24-25 参照]) のような、メルカトル図法によると考えられるものもあるが、この図が経緯度の観測点を示すというやや特殊な意義をもつからであろう。ともあれ、このようなロシア側の地図の図法のちがいがどのように処理されたかは気になるところである。日本側の図のほとんどに経緯度の記入がないこともふくめて、今後検討すべき課題である。



図 1-8：東亞二十万分一圖「奉天」図幅（滿洲軍總司令部製）の左上部分（大阪大学蔵）

もうひとつ言及しておく必要があるのは、上記のような5点の東亞二十万分一圖の図郭とロシア製「奉天省行軍路図 1901-1902年」の図郭の整合関係である。両者の図郭は東西が経度1度、南北が緯度40分で、各図郭の位置は同様になっていることについてはすでに触れた。図法にかかわらず対応する図の描く範囲は同様になると考えられるが、比較してみると上記「奉天」図幅の場合、「奉天省行軍路図 1901-1902年」のIV-5図幅を比較してみると、前者の方が東に向かって3kmほど東にズレていることがわかる。また南の「鳳凰城」図幅の場合は、東側へのズレはもっと大きく、6km弱にも達する。このためか、鳳凰城市街は図1-4に示した清國二十万分一圖の場合では147号「寛甸縣」図幅の西端に描かれていたものが、東亞二十万分一圖では西側に隣接する146号の東端にと移り、その図郭名も「鳳凰城」とされてしまった。東経124度の東にあるべき鳳凰城がその西側に移ることになったわけである。東亞二十万分一圖の編集にあたっては、ロシア製の8万4千分の1図が利用され、図幅のなかでの奉天や遼陽の位置が変化したとしたが、図郭については一致させていないことになる。この背景として、ど

のような地図学的事情があるのかは重要な検討事項であるが、今後の課題としておきたい。ともあれ、東亞二十万分一圖が戦時に応急的に作製された地図であったことを明示する。

ところで、上記のような「東亞二十万分一圖」と明記された5図幅以外では、この時期の20万分の1図では四隅に経緯度を記入するものをまだ発見していない。遼陽会戦以後、冬を迎えて戦線は急速に移動せず、「奉天」図幅を例にすると、その充実がはかられた（小林 2021）。

他方、上記の5図幅以外についても改訂が進み、それらは合わせて「東亞二十万分一圖」と呼ばれるようになったようである。臨時電話隊用に支給が申請された「東亞二十万分一圖」のリスト（1904年10月26日、JACAR: C07082341200）には、全33図幅のタイトルが示され、それは上記5図幅だけでなく、後掲の表1-4にあらわれる北部地域の図のタイトル（13図幅）にくわえ、南部海岸部の20万分の1図のタイトルも含んでいる。なお表1-4に示す図では、第2版～第5版と改訂が加えられた図幅が多い。これからすると、表1-4に見られる図の初版はこの時期にすでに印刷されていたことがうかがわれる。

表 1-3 : 20 万分の 1「南満洲圖」の目録

タイトル	経度 (東経)	緯度 (北緯)	東清鉄道南区線	JACAR
奉化及興隆店	124° ~125°	43° 20' ~44° 40'	南東部を通過	C14021108200
長春及農安	125° ~126°	43° 20' ~44° 40'	北西部を通過	C14021108300
吉林及烏拉街	126° ~127°	43° 20' ~44° 40'	—	C14021107900
鐵嶺及昌圖	123° ~124°	42° ~43° 20'	南東部を通過	C14021108500
開原及八面城	124° ~125°	42° ~43° 20'	北西部を通過	C14021108400
英額城及小孤山	125° ~126°	42° ~43° 20'	—	C14021108000
海龍及磨盤山	126° ~127°	42° ~43° 20'	—	C14021108100

以上のような推測に関連して、初期の「清國二十万分一圖」から表 1-4 に示す 20 万分の 1 図への移行期に作製された図の内容を示唆する図群がアジア歴史資料センターの公開している資料にみられる (JACAR: C14021107700~C14021108500)。まだその画像を検討しただけであるが、特色を紹介しておきたい。表 1-3 に示すような、「南満洲圖」という共通タイトルをもつ全 7 点の縮尺 20 万分の 1 図で、やはり奉天以北の地域を図示する。またいずれも縦長である (図 1-9)。南北に隣接する 2 枚の図幅を接合したためと考えられるが、接合以前の姿を想像することは容易である。いずれでも四隅に経緯度が示されており、各図幅の東西は緯度 1 度で「清國二十万分一圖」と変わらない。他方南北は各 40 分の図を上下に接合したことから 80 分となっている。図 1-5 と比較すると、図のタイトルに変化が見られるとはいえ、経緯度については基本的に「清國二十万分一圖」の枠組みを受け継いでいることに疑問の余地はない。

図の内容に移ると、やはり「清國二十万分一圖」のように、トラバース測量によるルート図が主体で、ハルビンから南下する「東清鐵道南区」(後の南満洲鐵道)の路線は、あとから記入されたことが明らかである。なおトラバース測量のルートは、1880 年代の日本軍将校の旅行図 (アメリカ議会図書館、地理地図部蔵、小林ほか 2017 ; 山近ほか 2017 を参照) をもとになっている。伊集院兼雄の「満州中部之圖」、酒匂景信の「満洲東部旅行圖」、倉辻靖二郎の「從營口至甯古塔城路上圖」の記載と一致する部分を確認することができる (アメリカ議会図書館蔵、初期外邦測量原図データベース [大阪大学] を参照)。

この図群の成立についてはさらに検討すべきことが少なくないが、1905 年 3 月に陸地測量部で刊行された点は示唆的である。奉天会戦が終了する時期に、それ以後の戦闘域を図示するものとして刊行された事があるからである。ただし、依然として点と線の図であり、戦闘用には役立たず、ほとんど使われなかったと考えられる。奉天会戦以後にまず使われたのは、表 1-1 に示したような 8 万 4 千分の 1 図 A (後述) で、ロシア製図の 8 万 4 千分の 1 図を翻訳して、やはり 1905 年 3 月に満洲軍総司令部により刊行された。なおやはり満洲軍総司令部により、つづく 4 月に上記「露版四十二万分一圖」が刊行されたのは、全体で広域をカバーする「南満洲圖」の代替とみることもできよう。



図 1-9 : 南満洲二十万分一圖の接合関係

表 1-4：滿洲軍總司令部製二十万分一図の目録

番号	タイトル	刊期	刊行機関	サイズ (cm)	備考	濱面又助中佐旧蔵図との関係
1	鄭家屯 (第 2 版)	1905 年 8 月 7 日	滿洲軍總司令部	29.0×32.5	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺	—
2	奉化 (第 2 版)	1905 年 8 月 8 日	滿洲軍總司令部	46.2×58.1	裏に「祕」朱印	同
3	長春 (第 2 版)	1905 年 8 月 21 日	滿洲軍總司令部	46.3×58.1	裏に「祕」朱印	1905 年 4 月刊
4	吉林	1905 年 5 月	滿洲軍總司令部	46.3×58.0	裏に「祕」朱印	同
5	昌圖 (第 5 版)	1905 年 8 月 18 日	滿洲軍總司令部	46.4×58.1	裏に「祕」朱印	第 4 版、1905 年 7 月 31 日刊
6	八面城 (第 4 版)	1905 年 8 月 6 日	滿洲軍總司令部	46.2×58.0	裏に「祕」朱印	同
7	海龍 (第 3 版)	1905 年 8 月 4 日	滿洲軍總司令部	46.2×58.0	裏に「祕」朱印	同
8	磨盤山	1905 年 5 月	滿洲軍總司令部	46.4×58.1	裏に「祕」朱印	同
9	鐵嶺 (第 2 版)	1905 年 7 月 23 日	滿洲軍總司令部	46.3×58.2	裏に「祕」朱印	1905 年 7 月 24 日刊
10	開原 (第 2 版)	1905 年 8 月 1 日	滿洲軍總司令部	46.2×58.1	裏に「祕」朱印	同
11	英額城 (第 2 版)	1905 年 8 月 2 日	滿洲軍總司令部	46.1×58.1	裏に「祕」朱印	同
12	奉天	1905 年 9 月 27 日	滿洲軍總司令部	46.3×57.6	裏に「祕」朱印	1905 年 1 月、「營盤」と接続
13	葦子峪 (第 2 版)	1905 年 8 月 13 日	滿洲軍總司令部	46.3×58.2	裏に「祕」朱印	1905 年 5 月刊
14	興京 (第 3 版)	1905 年 8 月 12 日	滿洲軍總司令部	46.2×58.1	裏に「祕」朱印	第 2 版、6 月 15 日刊
14'	興京 (第 3 版)	1905 年 8 月 12 日	滿洲軍總司令部	46.3×58.3	裏に青鉛筆で図幅名・縮尺	—
15	總司令部製二十万分一八面城補足圖	1905 年 8 月 29 日	第四軍參謀部	39.6×27.2	八面城図幅に貼り付け用、また上方に「威遠堡門昌圖五万分一補足圖正誤」を記載	—
16	二十万分一鉄峯西方補足圖	1905 年 7 月 24 日	滿洲軍總司令部	33.5×20.3	鐵嶺図幅西側南部に接する	—
17	英額城下邊訂正圖	1905 年 8 月 11 日	滿洲軍總司令部	6.5×29.1	英額城図幅の南西端に一致	—

注(1)：図には経緯度が示されていない。

(2)：補足図を除き、北方を図示するものから配列する。また同じ緯度の場合は西側のものほど上に配列している。

(3)濱面又助中佐旧蔵図は、JACAR: C13110417100; C13110417200 で閲覧可能。

以上のような前置きをふまえて、表 1-4 に移りたい (図 1-10 も参照)。ここでは 2020 年に購入した図幅に加え、アジア歴史資料センターが公開している、第一軍所属の第十二師団參謀であった濱面又助少佐旧蔵の 20 万分の 1 図についても示している。多くは同一の図であるが、購入図より刊期がさかのぼるものも見られ、両

者を比較すれば、図の改訂過程をうかがうことができる。まずタイトルから見ると図 1-4 にみえるものから変化したものが多い。「縣」や「府」といった行政上の称号の変化を無視しても、427 号「大孤山」→「八面城」、475 号「磨盤山」→「海龍」、159 号「開原府」→「鐵嶺」、160 号「嚶嘶河路」→「開原」、120 号「海龍城」→

「英額城」、155号「撫順城」→「葦子峪」、156号「新兵堡」→興京がある。これは「清國二十萬分一圖」の図郭の設定が不充分であったことを示唆する。「清國二十萬分一圖」は、上記のようにいずれも1880年代の将校のトラバース測量図をもとにしており、経緯度測量を実施しておらず、とくに経度については不十分な点が多く、新規の図郭設定にもとづいて図名を改訂せざるを得なかったわけである。また類似のことは、上記「南満洲圖」についてもあてはまる。

	鄭家屯	奉化	長春	吉林
昌圖		八面城	海龍	磨盤山
鐵嶺		開原	英額城	
奉天		葦子峪	興京	

図 1-10：満洲軍總司令部製の20万分の1図の接合関係

表 1-4 の図のタイトルにもどろう。当該図郭内の主要集落の地名を宛てていると判断されるものが多く、それが図の縁辺に位置する場合もみられ、的確な命名とは感じられない場合もみられる。刊期にうつると、一部を除いて1905年7~9月で、版を重ねている場合が多い。「奉天」図幅については、版に関する記載がないのは、奉天会戦の準備過程で余りに何度も改版されたために正確な版の番号がわからなくなっていたことをうかがわせる。サイズはほとんど同一であるが、冒頭の鄭家屯と末尾の補足図・訂正図は小さい。最も版数の多いのは「昌圖」図幅となるが、日露戦争末期にこの付近で戦線が膠着状態になったからであろう。

つぎに濱面又助少佐旧蔵図との比較に移ろう。南方の「奉天」にならぶ3図幅から見ると、まず「奉天」の場合は、大きな変化が認められる。濱面図の刊期は1905年1月で、奉天と南の遼

陽との間で戦線が膠着していた厳冬期のものとなる。図幅の西の「新民屯」図幅の東部だけでなく、南の「遼陽」図幅の北部、さらに東の「營盤」図幅（後に「葦子峪」と改称）の西部が貼り合わせられている。1904年10月にされた「奉天」図幅とこれを比較すると、北部の中央で空白部分がやや減少しているが、その他に大きな変化はなく、戦線の膠着が地図にも反映されているという印象を与える。これに対して1905年9月27日の「奉天」図幅では、西側に「新民屯」図幅の東部が貼り足されているものの、東側には貼り足しがなくなり、南部の一部（やはり遼陽をふくむ）に貼り足しが見られるだけとなる。空白は東端部の一部に限られ、奉天会戦およびその後の測量によるのか、充実が著しい。

「奉天」図幅の東に隣接する図幅のタイトルは図 1-4 では「撫順城」となっているが、「葦子峪」と改称されている。これは撫順の集落が新規の「奉天」図幅ではその東部に記載されるようになったため、別の集落名がタイトルに採用されたわけである。濱面旧蔵図（1905年5月）では南部と東部に空白域が見られるが、8月13日の第二版では、交通路だけが記入された北東部の大部分に等高線が記入され、東部の空白部も減少している。奉天会戦後も地図の充実が継続されたことがわかる。さらに東につづく「興京」図幅では濱面旧蔵図（1905年6月、第二版）で、とくに東部と南部に空白域がめだつが、第3版（8月12日）では興京市街の立地する北西部で等高線の描かれた地域が増加している。

より北方の「鐵嶺」図幅に移ると、濱面旧蔵図は購入図幅より作成日が1日遅れるだけである。購入図の西南端に西側の隣接図の一部を貼り足しており、改訂がつづけられていたことがわかる。さらに北方の「昌圖」図幅になると、購入図（第5版、1905年8月18日）は、濱面旧蔵図（第4版、1905年7月31日）より18

日遅れるだけであるが、中央に書き加えた部分がある。すでに休戦協定の交渉が開始されていたが、この付近でなお小競り合いが行われたためであろう（参謀本部編 1914: 207-220）。

最北に位置する「長春」図幅には、以上のよう
にみてきた改訂と逆行するような変化が見られる。濱面旧蔵図（1905年4月）に見られた長春の西南方向およびその南の伊通の北西方にみられた等高線が消去されているのである。このような改変が行われた背景を推測することは容易ではないが、この地域は日本軍が占領しておらず、元図になったロシア製図に何か変化があった可能性が考えられる。

ところで、以上のような20万分の1図の図郭に注目して、とくに東清鉄道南区線（南部支線）のコースとの関係を、ロシア製の「奉天省行軍路図 1901-1902年」（16万8千分の1）の図郭と比較対照すると、やはり東へのズレがあきらかである。すでに四隅に経緯度を記入する東亞二十万分一圖の作製に際しては、「奉天省行軍路図 1901-1902年」を参照していないと推定したが、表 1-4 に示したその北方に連なる20万分の1図の作製に際しても、参照されなかったと考えられる。

他方濱面少佐旧蔵の20万分の1図と対照すると、この図群では改訂が継続されていることがわかり、前線での利用に向けて、アップデートが繰り返されたことが明らかである。またその内容は、表 1-3 に示した「南満洲圖」とは大きな差があり、奉天会戦以後の戦線の北上に向けて、大幅な改善が行われたことも推定できる。

この背景には、後述するロシア製図を翻訳した8万4千分の1がある。この8万4千分の1図のカバー範囲は、ここで検討している20万分の1図のカバー範囲よりかなり狭いが、両者が対照できる地域について比較すると、20万分の1図は、8万4千分の1図の縮小版という性格が強い。まず8万4千分の1図が準備されて、それをもとに20万分の1図が作成されてい

たことがうかがえる。両者の刊期の前後関係は、今まで収集出来た資料では、そういう見方と必ずしも整合するわけではないが、奉天以北については、ロシア製8万4千分の1図を日本軍が入手してから、「南満洲圖」（表 1-3）に表れているような、旧来の20万分の1図をほとんど放棄して、新しい20万分の1図に転換されたといってもよいほどである。つぎにこのような観点から8万4千分の1図を検討したい。

(3) 満洲軍総司令部製8万4千分の1図

満洲軍総司令部が刊行した8万4千分の1図を検討してまず明らかなのは、その刊期が大きく二つに分かれるという点である。その一方（表 1-5 および図 1-11、全6点）が1905年3月と早いのに対し、他方（表 1-6 及び図 1-12、全12点および補足図5点）はそれよりかなり遅くなる。日本軍は奉天会戦終末期には前者のもとになるロシア製図を入手していたと考えられるのに対し、後者は奉天会戦終了後かなり時間が経過するまで、もとになるロシア製図を入手できなかったと考えられるわけである。

開原	威遠堡門
鐵嶺	貂皮屯
張家樓子	夏家堡子

図 1-11：満洲軍総司令部製の8万4千分の1図（A）の接合関係

新開鎮	榆樹臺	二十家子
八面城	奉化	赫爾蘇
大窪	次榆樹	十里堡 (葉赫站)
昌圖	連家街 (威遠堡門)	掏鹿

図 1-12：満洲軍総司令部製の8万4千分の1図（B）の接合関係

表 1-5：滿洲軍總司令部製八万四千分一図の目録A

番号	タイトル	刊期	刊行機関	サイズ (cm)	備考
1	開原	1905年3月	滿洲軍總司令部	23.4×58.2	裏に「祕」朱印
2	威遠堡門	1905年3月	滿洲軍總司令部	23.1×58.0	
3	鐵嶺	1905年3月	滿洲軍總司令部	46.3×58.2	裏に「祕」朱印
4	貂皮屯	1905年3月	滿洲軍總司令部	45.7×58.2	裏に「祕」朱印、東半部空白
5	張家楼子	1905年3月	滿洲軍總司令部	46.2×58.2	裏に「祕」朱印
6	夏家堡子	1905年3月	滿洲軍總司令部	45.6×58.4	裏に「祕」朱印

注(1)：図には経緯度が示されていない。

(2)：補足図を除き、北方を図示するものから配列する。また同じ緯度の場合は西側のものほど上に配列している。

表 1-6：滿洲軍總司令部製八万四千分一図の目録B

番号	タイトル	刊期	刊行機関	サイズ	備考
1	新開鎮	1905年8月10日	滿洲軍總司令部	39.2×36.9	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺
2	榆樹臺	1905年8月16日	滿洲軍總司令部	46.3×58.1	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺
3	二十家子	1905年8月11日	滿洲軍總司令部	39.8×54.1	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺
4	八面城	1905年8月11日	滿洲軍總司令部	39.1×53.7	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺
5	奉化	1905年8月16日	滿洲軍總司令部	46.3×58.1	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺
6	赫爾蘇	1905年8月16日	滿洲軍總司令部	46.3×58.2	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺
7	大窪	1905年6月20日	滿洲軍總司令部	46.2×57.9	
8	次榆樹	1905年7月25日	滿洲軍總司令部	46.2×58.2	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺
9	十里堡	1905年9月9日	滿洲軍總司令部	38.9×58.2	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺
10	昌図	1905年9月1日	滿洲軍總司令部	46.2×58.2	裏に「祕」朱印
11	蓮花街	1905年9月5日	滿洲軍總司令部	46.3×58.2	裏に「祕」朱印
12	掏鹿	1905年9月8日	滿洲軍總司令部	46.3×58.4	裏に「祕」朱印
13	(赫爾蘇貼付図)	1905年9月7日	滿洲軍總司令部	直角三角形 32.6×39.2	「本圖ハ總司令部製八万四千分一赫爾蘇ニ貼付スルモノナリ」
14	赫爾蘇下方補足圖	1905年8月11日	滿洲軍總司令部	18.6×27.5	赫爾蘇図幅の南(十里堡図副の北西部分)に相当
15	仮題:次榆樹貼付図	1905年9月3日	滿洲軍總司令部	30.3×28.7	「本圖ハ總司令部製八万四千分一次榆樹ニ貼付スルモノナリ」
16	遼陽窩棚	1905年8月19日	滿洲軍總司令部	46.3×39.9	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺、大窪の西南方、金家屯の西に接続
17	金家屯	1905年8月19日	滿洲軍總司令部	40.0×46.1	裏に赤鉛筆で図幅名・縮尺、大窪の西南方、遼陽窩棚の東に接続

注(1)：図には経緯度が示されていない。

(2)：補足図を除き、北方を図示するものから配列する。また同じ緯度の場合は西側のものほど上に配列している。

もうひとつ留意すべきは、この図群が8万4千分の1(2露里図)という、元図になったロシア製地図の縮尺そのままに印刷されているという点である。すでに示したように、日露戦争の初期にはロシア製8万4千分の1図を縮写して20万分の1図にするほか、日本製の「遼東半島五万分一圖」に接する部分については、逆に伸写して「露版五万分一圖」を作成することが指示された。以後もロシア製地図の利用に当たっては、このような日本側の地図の縮尺に合わせるような方針が維持されており、それは日本軍の兵士、となかでも将校に、彼らが慣れ親しんだ縮尺の地図を提供して、戦場での錯誤が発生しないようにするために行われたと考えられる。他方、ロシア側から得た地図の翻訳を縮尺の変更なしにまとまって印刷した例はすくなく、上記の「露版四十二万分一圖」およびここで検討する8万4千分の1図だけのようである。この背景には、日本側の地図の蓄積のない地域での戦闘がさしせまり、縮尺を変更することなく急いで翻訳・印刷せねばならないという事情があったと推測される。とくにこの8万4千分の1図は、奉天会戦後北方で防御態勢を整えようとするロシア軍の攻撃を目指して作られたものであろう。

以下このような観点から検討をくわえたいが、関連してさらに留意されるのは、一方で「清国二十万分一圖」の系譜を引く20万分の1図を作製しつつも、他方で8万4千分の1図を作製すれば、両者の間の図郭の整合性を保持するには、図のサイズの調整が必要となる点である。日本で作製されている地形図が2万5千分の1、5万分の1、さらに20万分の1と縮尺が固定されているのは、ほぼ同一のサイズで印刷される各縮尺の図の図郭を整合されるためと考えられる。8万4千分の1という倍数関係にない縮写の図がどのようなサイズで印刷されているかに注目すると、満洲軍総司令部に備えられていた印刷機の関係からか、補足図のような場合を除

き、20万分の1図と同様のサイズで印刷されていることがまず留意される。また20万分の1図に、8万4千分の1図の図郭を位置づけると、両者の図郭は整合せず、東西は二つの20万分の1図にまたがる場合が少なくない。これに対して、16万8千分の1の「奉天省行軍路図1901-1902年」とは整合するかと考え、それに位置づけても、二つの図幅にまたがって整合しない。現在のところロシア製の8万4千分の1図の現物に接することができないので、これ以上の検討は困難であるが、満洲軍総司令部製の8万4千分の1図の図郭は、印刷機の都合で設定されていると考えられる。とくに後述の第一軍の作製した8万4千分の1図の図郭を検討すると、その可能性が大きくなるが、これについては、改めて検討したい。

このような8万4千分の1図のうち、作製時期の早いもの(以下A群)からみると、東亞二十万分一圖の「奉天」図幅の北側に接する図幅でも空白部分が多く、上で検討した20万分の1図の該当部分と比較しても、それがあてはまり、元図となったロシア製図の作製期はかなり早かったのではないかと考えられる。この図群では表1-5に示したように、北端の図のサイズがとくに南北方向で小さいのは、元図の図示範囲に合わせるように作製されたことがうかがえる。なお、この北限は北緯42度40分の20万分の1図の図郭と整合する。

これに対して作成時期の遅いもの(以下B群、表1-6)は、この北緯42度40分線の北側に北方にむかって作製されているが、とくに東清鉄道南区線に沿った地域で記載が充実しており、漢字地名も多い。また5点の補足図では「金家屯」図幅の一部を除いて地名は全部漢字で示されており、基本的に日本側によって準備された可能性が高い。

なお、A群の図とB群の図の作成時期のギャップに関連して言及しておきたいのは、本稿の冒頭でふれた金(2009)の報告(「日露戦争時

の戦場で偵察用に作製・使用されたと推定される地図について)にみられるように、1905年の3月下旬以降に作成されたと考えられる、多数の偵察図が残存していることであろう。上記北緯42度40分に近い威遠堡門の偵察図(「威遠堡門附近之圖」、2万分の1の縮尺と注記)などは、その攻防のためにつくられたことがあきらかである。これらは本格的な測量によったものではないが、大縮尺のため詳細で、A群の図の北端部(「威遠堡門」図幅)やB群の図の南端部(「蓮花街」図幅)との対比も容易である。このなかには縮尺を5万分の1とするものもあり、B群の図がまだ使えず、偵察図を作る以外なかったという事情がうかがえる。表1-6に示したB群の図の刊期は南の方ほどおそいのは、どのような事情によるか不明であるが、この時期の戦線の変動との関係を検討する必要がある。

以上満洲軍総司令部製の地図群を検討した。さらに検討しなければならないことも多いが、これをふまえ、つぎに第一軍参謀部製の地図について検討に移りたい。

2. 第一軍参謀部作製図

第一軍は、遼東半島から北上する日本軍の最右翼に位置し、満洲軍総司令部の指揮を受けていたにもかかわらず、遠隔地に位置したためか、独立して測量や製図、さらに印刷を行う機能を持っていた。以下その作製図を検討するに当たって留意される点をまず示しておくこととした。

多くの図を印刷した第一軍参謀部は、満洲軍総司令部の場合のように、地図作製については編集や印刷を担当しており、他方測量は後掲の表のように、同軍に所属する師団(第十二師団)や旅団(近衛後備混成旅団[通称梅沢旅団])のほか後備第一師団(鴨緑江軍)が行った。まだ他の例の確認が必要であるが、日露戦争に際し

ては師団レベルでの印刷機能は、謄写版態度に限られていたようで(小林2011:129-131)、ここに示すようなサイズの図の印刷は、軍レベルの参謀部の担当になっていたと考えられる。そこには地形図程度のサイズの用紙の印刷に適した設備があり、ロシア製図の翻訳図だけでなく、師団や旅団が準備したサイズの大きな地図の印刷も担当した。

第一軍はまた、すでに見てきたような満洲軍総司令部が刊行した地図を利用する立場にある。ただし、その図を補足するような図を作製するだけでなく、後述するように満洲軍総司令部が翻訳したロシア製の図と同じ版の図を、ほぼ同時に独自に翻訳していたと考えられる例もみられ、ある程度の独立性をもちつつ情報の交換を行っていたと考えられる。他方、前節でみた満洲軍総司令部製の地図と比較して、第一軍参謀部が印刷した図には、注記が多い点も注目される。形式が整った満洲軍総司令部製の図にくらべ、第一軍参謀部の図からは、図に示された情報のソースを示すことが多く、またその入手に応じて改訂版をさまざまなカバー範囲で複雑に刊行している場合もあり、地図の信頼度について利用者である将校に伝えておく必要があったことがうかがえる。個別の地図で、部分によりソースが違う場合には、その詳細について言及し、より現場に近い図が少なくないとも言ってもよい。

これに関連して触れておかなければならないのは、奉天会戦以後も日本軍はロシア軍の作製した図の利用をつづけるが、それが整備されていない地域については、補足的な測量を行うほか、雇用した「間諜」を派遣して地理情報の収集をつづけているという点である。ロシア軍との戦闘がつづくかぎり、最新の情報を盛り込んだ地図の供給が求められており、それに向けて、さまざまなソースからの情報を編集してわけである。以下、小縮尺図から順に目録を示し、満洲軍総司令部製図と比較しつつ特色にみていきたい。

(1) 第一軍参謀部製 20 万分の 1 図

入手した第一軍作製の地図群のなかで、20 万分の 1 図の占める割合は低いが、その注記には日本軍の地図作製の実情が示されている（表 2-1）。

冒頭の「太子河上流地区補足圖」は、図郭をもたない、奉天会戦以前の図であるが、それに至る過程で後備第一師団（鴨緑江軍）、第十二師団（第一軍）、騎兵第二旅団（第三軍）が地図を作製してきた地域を簡潔に示す。この時期に整備されつつあった 20 万分の 1 図の「奉天」、「葦子峪」、「遼陽」、「賽馬集」と 4 図幅の接合部分の交通路と太子河の流路を描いており、とくにそれらが作製した 5 万分の 1 図のカバー範囲の概要を知るのに有用である。

つづく図郭の描かれた 20 万分の 1 図（「海龍」、「英額城」）は、満洲軍総司令部製の 20 万分の 1 図の一覧図（図 1-10、表 1-4 も参照）のなかでは、東部を示し、第一軍の担当地域となる（図 2-1）。ロシア軍製の地図からの情報を軸に作製された満洲軍総司令部製の地図を補足しようとする姿勢がうかがえ、それには清国側の地図のほか、「情報圖」を利用している。この「情報圖」については、日露戦争における日本軍の地図整備を概観した瀧原（1928）が、ロシア軍の制圧地域のような、測量や偵察の困難な地域について、現地の人々に「聞き合わせて著名の村落や主要の道路記入した」ものとしている（103 頁）。可能な限り地理情報を集めるという姿勢があきらかである。

なお、末尾の「八面城」図幅の補足図は、空白であったと考えられるその南東部をカバーするもので、南部は「目算測圖」によるとされている。これはコンパスや歩測による測量をさしており、第一軍所属部隊が担当したものであろう（後述の表 2-3 の 13「掏鹿」参照）。また表

1-4 に示した満洲軍総司令部製の「八面城」図幅（6 号）と比較すると、この補足図の一部を修正しつつ採用していることが明らかである。

(2) 第一軍参謀部製 10 万分の 1 図の目録

前節に示した満洲軍総司令部作製図（表 1-2、表 1-4～6）には 10 万分の 1 図はないが、奉天会戦前後になるとこの縮尺の図が奉天周辺について作成されていた。「奉天」・「奉集堡」・「新民廳」・「浪洞溝」の 4 図幅である（JACAR: C07082420800）。表 2-2 の冒頭は、このうち東側に南北にならぶ「奉天」・「奉集堡」図幅を補足するもので、一部を切り抜いて両者に貼り付けるように指示されている。二つの部分にわかれるが、いずれも備考に示すように、8 万 4 千分の 1 図を縮小したものである。つづく「新民廳」（図 2-1）は、図幅全体がわかるこの図群の唯一の図で、注目されるが、刊期や刊行機関名を示さない。恐らく上記文書（JACAR: C07082420800）が示唆するように、満洲軍総司令部であろう。

つづく図群は「吉林街道以東交通路偵察略圖」で、時期は 1905 年 8～9 月と日露戦争末期となる。奉天会戦以後、戦線の急激な動きはなくなるが、まだロシア軍は大きな兵力を保持していると考えられ、東部でもロシア軍の陣地の拡大が報告されていた（JACAR: C13110464400）。吉林街道は、奉天北方の要衝、開原から北東方向にのびる交通路で、伊通を經由して吉林に至る東部の主要交通路である。これより東側一帯の交通路網（北限は伊通）を示すもので、ロシア軍側の戦線の背後については、中国人と考えられる「間諜」からの情報を頼る以外なかったことがわかる（図 2-2a,b）。各図には朱で注記を示し、また冒頭（表 2-2 の 3）では各ルート道路の概況を記している。

表 2-1：第一軍参謀部製 20 万分の 1 図目録

番号	タイトル	刊期	刊行機関	サイズ (cm)	備考
1	太子河上流 地区補足圖	1904年12 月	第一軍参 謀部	54.4 × 39.3	本圖ハ後備第一師団、第十二師団、騎兵第二旅團偵察ニ關ル 畧側圖ヲ綜合セルモノナリ
2	海龍	1905年8 月7日	第一軍参 謀部	39.5 × 55.0	本圖中英城子、大肚川、沙河ニ至ル間ハ稍々信ズ可キ支那圖 ニ據リ其他ハ情報圖ニヨリ地形ヲ現示セルモノナリ
3	英額城	1905年7 月	第一軍参 謀部	39.4 × 55.0	本圖中柳河以西四平街ニ至ル地域ハ稍信ズ可キ支那圖ニ主 リ又風倒樹川及楊勾附近ハ情報圖ニ據リ 地形ヲ現示シ以 テ總司令部調製英額城二十万分一圖ヲ補足セルモノナリ
4	(八面城図 に貼付)	1905年7 月	第一軍参 謀部	直 角 三 角形状 52.8 × 46.2	總司令部調製八面城二十万分一圖に貼付 (掏鹿及孤榆樹以南 ハ目算測圖ニ據リ補足シ以北ハ情報圖ニ據リ地形ヲ現示セ ルモノナリ)

表 2-2：第一軍参謀部製 10 万分の 1 図目録

番号	タイトル	刊期	刊行機関	サイズ (cm)	備考
1	總司令部調製十万分一奉天、奉天 堡ニ貼用(原圖露版八万四千分一 圖)	1905年3月 7日	第一軍参謀 部調製印刷	46.5 × 54.8	2図からなる補足図で、両者は東西に 接続する、西側の図は大半が 8 万 4 千分の 1「海浪寨」図幅の、東側の図 は同「救兵台」図幅の縮小による
2	新民廳	不明	不明	39.1 × 54.0	縮尺は約 10 万分の 1、図郭が示され、 東は「奉天」、南は「浪洞溝」に接続 と記載
3	吉林街道以東交通路偵察略圖付 録(略圖参照)	1905年8月 30日	第一軍参謀 部	39.1 × 54.3	道路とその特色についての記述、「摘 要中、車両ノコトニ関スルモノハ支 那車輛ヲ基準トセル者アリ」
4	吉林街道以東交通路偵察略圖付 録(第 1)	1905年8月 30日	第一軍参謀 部	39.6 × 54.7	「本圖ハ六月ヨリ八月ニ至ル間派遣 セシ間諜ノ報告ヲ綜合シテ調査セル モノトス」としつつ凡例を示す
5	吉林街道以東交通路偵察略圖付 録(第 2)	1905年8月 30日	第一軍参謀 部	39.3 × 55.2	8 万 4 千分の 1「赫爾蘇」図幅付近
6	吉林街道以東交通路偵察略圖付 録(第 3)	1905年9月	第一軍参謀 部	39.4 × 54.7	8 万 4 千分の 1「大疙疸」図幅付近
7	吉林街道以東交通路偵察略圖付 録(第 4)	1905年8月 30日	第一軍参謀 部	39.1 × 55.0	
8	吉林街道以東交通路偵察略圖付 録(第 5)	1905年8月 30日	第一軍参謀 部	39.2 × 55.0	
9	吉林街道以東交通路偵察略圖付 録(第 6)	1905年8月 30日	第一軍参謀 部	39.5 × 54.5	掏鹿が大きな集落
10	吉林街道以東交通路偵察略圖付 録(第 7)	1905年8月 30日	第一軍参謀 部	39.5 × 55.0	
11	吉林街道以東交通路偵察略圖付 録(第 8)	1905年8月 30日	第一軍参謀 部	39.6 × 54.5	商家台・官糧窖が大きな集落
12	吉林街道以東交通路偵察略圖付 録(第 9)	1905年9月	第一軍参謀 部	54.5 × 39.2	伊通州・英城子が大きな集落

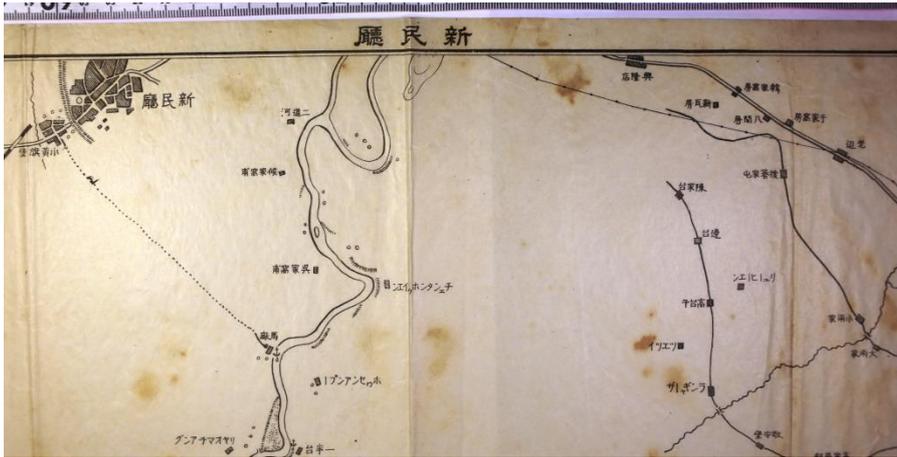


図 2-1: 10 万分の 1「新民廳」図幅

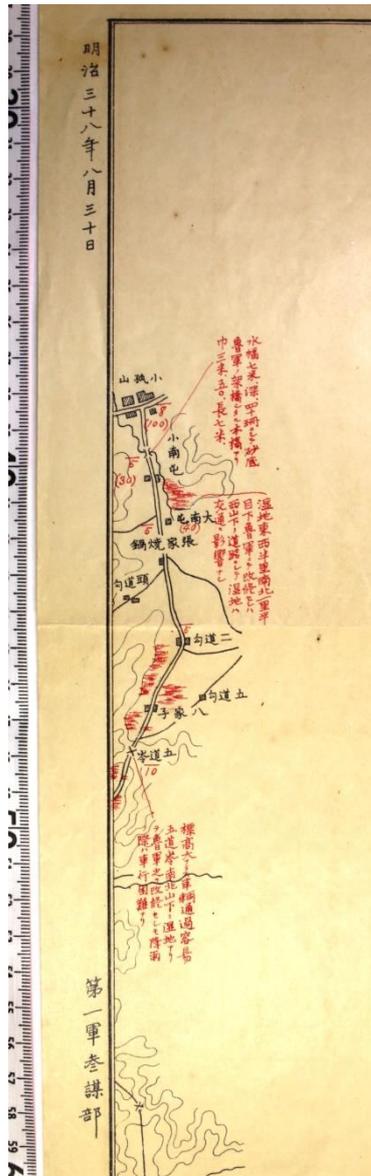


図 2-2a: 吉林街道以東交通路偵察略圖付録 (第 1) のルート記載例と刊期、印刷機関

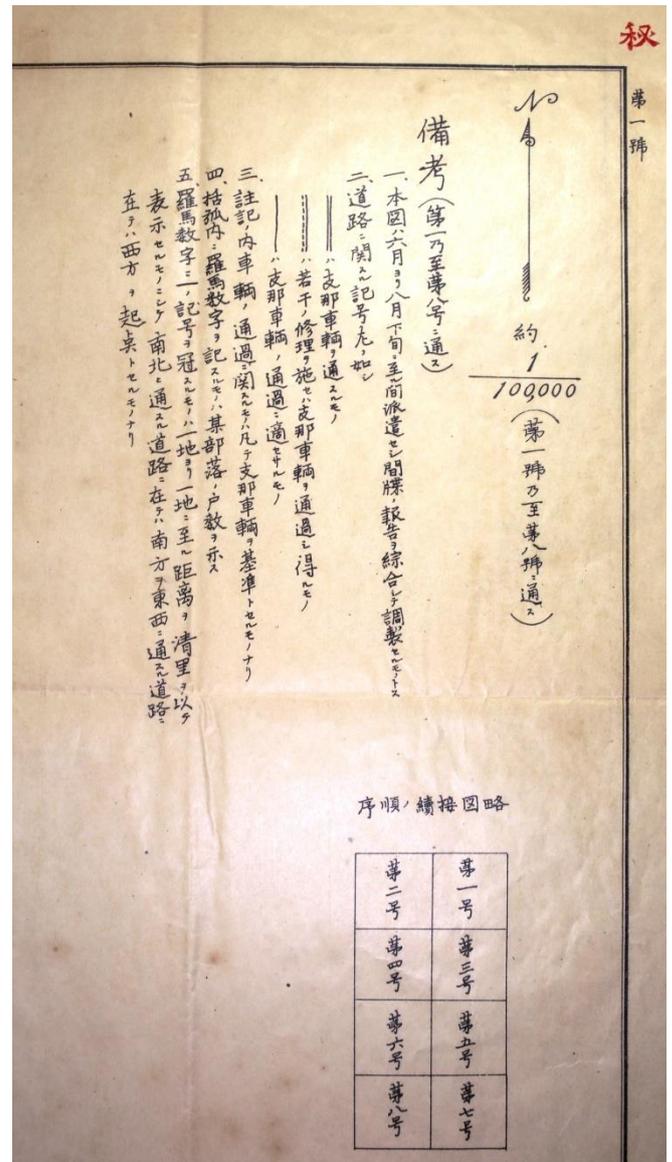


図 2-2b: 吉林街道以東交通路偵察略圖付録 (第 1) の縮尺・凡例・接合関係

(3) 第一軍参謀部製8万4千分の1図

つづく8万4千分の1図は(表2-3)、印刷時期により①奉天会戦期(1~6)、②奉天会戦終結直後(7~9)、さらに③日露戦争末期(10以下)と大きく三つに分かれる。以下、順に検討したい。

表2-2の冒頭図についてみたように、1905年3月初旬の奉天南東方の地域では、本格的な地図がそろっていなかったらしく、10万分の1図に貼り付ける補足図が作製された(1905年3月7日)。①にあらわれる図(「海浪塞」と「救兵台」図幅)は其の元図となるもので、原図のロシア製図(8万4千分の1図)が入手できて、急ぎよその翻訳・印刷、さらに改訂が進められたようである(3月3~6日)。また「海浪塞」図幅と「救兵台」図が接合されて、東西に広がる図幅も作製された(表2-3の4)。この頃にはこれらの図の中央部をロシア兵が占領するという状態だったようである(JACAR: C13110369800)。

その後ロシア軍の退却が始まり、戦線は奉天から北上する。その時期に印刷されたのが②の時期(3月12~14日刊)に印刷された図で、図幅名は満洲軍總司令部製図の表1-5の1、3、5と同じである。ただし、両者の地名を検討すると、同一の版のロシア製8万4千分の1図をもとにしているものの、翻訳(地名の音訳や漢字表記)は別々に行われたことがあきらかで、並行して類似の作業が行われたことがわかる。つづく③は6月~9月と刊期の幅が広いが、図1-11にみえる図郭と比較すればあきらかなように、第一軍の担当した北東方の図幅が多い。この地域は「赫爾蘇」や「葉赫站」(表1-5、図1-11では図幅名が「十里堡」)、「掏鹿」と8万

4千分の1図の横長の図郭に従うものもあるが、それ以东になると縦長の図郭をもつものが増え、さらに補足図も加わってその図示範囲は複雑に重合する。これは、10万分の1「吉林街道以東交通路偵察略圖」の解説でも触れたようなロシア軍の活動が継続していたからであろう。6月25日の第三軍参謀部の報告では、「吉林街道附近ヨリ掏鹿附近を経テ海竜城附近ニ亘ル地區ニ於テハ敵ノ移動依然トシテ已マサルモ大体ノ配備ハ著シキ變化ナキカ如シ」と述べている(JACAR: C13110465300)。これら図幅の注記をみると、「當部調製八万四千分一(圖)」をもとにしているという記載がめだつが、これがロシア製図の縮尺に合わせて第一軍参謀部が独自に測量して作製したものか、今後検討を要する。また東清鉄道南區線に沿った地域とちがい、この地域にはロシア軍の測量がおよばなかった地域が多かったこともうかがえる。なお「梅澤旅團」(近衛後備混成旅団)の実測あるいは目算によるとされている図は、後述の5万分の1図にもあらわれている。

(4) 第一軍参謀部印刷5万分の1図

表2-4に示す5万分の1図も印刷時期や元図の作製機関によって大きく三つのグループに分けることができる。①は後備第一師団参謀部が測図して、1905年1~2月に印刷されたもの、②は同年2月に印刷されているが、第12師団参謀部が測図したもので、いずれも太子河上流部となり、その位置は表2-1冒頭の「太子河上流地區補足圖」に示されている。なお、末尾の③は、奉天会戦後の7月に梅澤旅団が作製した「李家台補足圖」の3図幅である。

表 2-3：第一軍参謀部製 8 万 4 千分の 1 図

番号	タイトル	刊期	刊行機関	サイズ (cm)	備考
1	海浪寨	1905 年 3 月 3 日	第一軍参謀部	34.5 × 54.5	「露版八万四千分一實測圖」
2	露版八万四 千分一海浪 寨ニ接續	1905 年 3 月 3 日	第一軍参謀部	23.1 × 54.6	
3	海浪寨	1905 年 3 月 6 日 改正	第一軍参謀部	32.4 × 53.6	「露版八万四千分一實測圖」
4	海浪寨・救兵 台	1905 年 3 月 3 日	第一軍参謀部	54.7 × 85.4	「露版八万四千分一實測圖」
5	救兵台	1905 年 3 月 4 日	第一軍参謀部	54.6 × 39.5	「露版八万四千分一實測圖」 海浪寨に接續
6	救兵台	1905 年 3 月 4 日	第一軍参謀部	54.7 × 39.6	「露版八万四千分一實測圖」 海浪寨に接續
7	開原	1905 年 3 月 14 日	第一軍参謀部	26.1 × 54.5	「露版八万四千分一圖」
8	鐵嶺	1905 年 3 月 13 日	第一軍参謀部	39.1 × 54.3	「露版八万四千分一圖」
9	張家樓子	1905 年 3 月 12 日	第一軍参謀部	39.5 × 54.8	「露版八万四千分一圖」
10	赫爾蘇	1905 年 8 月 8 日	第一軍参謀部	39.2 × 52.8	本圖中大孤山及火石峯以西ハ露版ニヨリ其他ハ情報圖ニヨリ調製セルモノナリ
11	葉赫站	1905 年 8 月	第一軍参謀部	46.1 × 58.4	本圖ハ當軍ニ於テ測圖ヲ教育セン間諜記臆圖ニヨリ調製セルモノナリ
12	大疙疸	1905 年 8 月	第一軍参謀部	46.1 × 29.9	「葉赫站」図幅の東に接續
13	掏鹿	1905 年 7 月	第一軍参謀部	37.5 × 54.7	掏鹿邱家崗以南ハ目算圖ニヨリ其他ハ情報ニヨリ當部調製、八万四千分一掏鹿圖ヲ補足修正シタルモノナリ
14A	掏鹿右上部 張付圖	1905 年 8 月	第一軍参謀部	54.4 ×	當部調製八万四千分一掏鹿圖右端ニ貼用ス可シ
14B	威遠堡門附近 補足圖	1905 年 9 月	第一軍参謀部	19.2	本圖中威遠堡門孤榆樹以東ハ第二師団目算圖ニ依リ當部調製八万四千分一威遠堡門ヲ補足セルモノナリ
15	商家台	1905 年 6 月	第一軍参謀部	54.5 × 39.0	當部調製掏鹿及李家台八万四千分一圖ニ接續、商家台偏道峯以西ハ實測圖ニヨリ掏鹿圖並ニ李家台圖ノ一部ヲ修正シ北大勾及東?虎峯附近ハ情報圖ニヨリ地形ヲ現示セルモノナリ
16	英額城	1905 年 6 月	第一軍参謀部	54.3 × 39.3	總司令部製夏家堡子八万四千分一圖ニ接續
17A	商家台附近 補足図	1905 年 7 月	第一軍参謀部	58.3 × 46.4	本圖ハ梅澤旅團ノ實測圖ニヨリ當部調製八万四千分一商家台英額城圖ノ一部ヲ補修セルモノナリ
17B	高力墓子附近 補足圖				本圖小扣河附近ハ梅澤旅團目算ニヨリ其他ハ情報圖ニ據リ當部調製八万四千分一商家台圖ノ一部ヲ補修セルモノナリ
18	李家台附近 補足圖	1905 年 7 月	第一軍参謀部	54.6 × 39.3	本圖ハ梅澤旅團ノ實測圖ニヨリ當部調製八万四千分一李家台商家、英額城圖ノ一部ヲ補修セルモノナリ

表 2-4：第一軍参謀部印刷 5 万分の 1 図

番号	タイトル	刊期	刊行機関	サイズ	備考
1	高力警	1905年2月	後備第一師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	39.1×55.2	「軍事機密」、「陸地測量部仮製東亞五万分一圖接続」
2	下夾河	1905年2月	後備第一師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	54.6×39.0	「軍事機密」、「陸地測量部仮製東亞五万分一圖接続」
3	平頂山	1905年2月	後備第一師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	54.1×39.5	「軍事機密」、「陸地測量部仮製東亞五万分一圖接続」
4A	小市	1905年1月	後備第一師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	66.0×51.5	「軍事機密」、「陸地測量部仮製東亞五万分一圖接続」
4B	(三峯子、小市 図幅の下に貼り付けられている)	1905年1月	後備第一師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷		「軍事機密」、「陸地測量部仮製東亞五万分一圖接続」、小市の南に接続する「三峯子」図幅の名称は、2「下夾河」図幅の右下の一覧図にみえる
5A	城廠	1905年1月	後備第一師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	54.8×42.6	「軍事機密」、「陸地測量部仮製東亞五万分一圖接続」
5B	(5Aの西に接続)	1905年1月	後備第一師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	54.9×43.5	下部に「平頂山」と記入するが、3の「平頂山」との関係は不明
5C	(小市の左 [西]に接続する補足図)				
6	四平街	1905年2月	後備第一師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	54.3×39.0	「軍事機密」、「陸地測量部仮製東亞五万分一圖接続」
7	藍河峪	1905年2月	後備第一師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	39.5×59.4	「軍事機密」、「陸地測量部仮製東亞五万分一圖接続」
8	老嶺	1905年2月	後備第一師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	39.4×64.5	「軍事機密」、「陸地測量部仮製東亞五万分一圖接続」
9	石橋子	1905年2月	第十二師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	39.0×54.0	
10	本溪湖	1905年2月	第十二師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	39.3×54.6	
11	達官塞	1905年2月	第十二師團参謀部測圖、第一軍参謀部印刷	39.0×54.0	
12	瓢起屯	1905年4月	近衛後備混成旅團測圖、第一軍参謀部印刷	39.4×34.1	
13	李家台附近補足圖、其一	1905年7月	梅澤旅団實測、第一軍参謀部印刷	43.5×58.2	其二、其三の北に接す
14	李家台附近補足圖、其二	(1905年7月)	梅澤旅団實測、第一軍参謀部印刷	58.3×43.4	其三の東に接す、右側中央に商家台の集落
15	李家台附近補足圖、其三	1905年7月		55.9×40.9	其二の西に接す、上部中央に李家台の集落

後備第一師團参謀部の作製した①には、さまざまなサイズの図があり、その接合関係が複雑で、計画的に作られたものと言うより、山間部の各地で行われた測圖により作製されたものを統合したようにみえる。また多くに「陸地測量部仮製東亞五万分一圖接続」と注記されており、隣接地域で臨時測図部が行った測量による図があったことを示している。臨時測図部は戦時を利用して中国大陸や朝鮮半島で測量を行うこと

を目的に設立された臨時組織である。陸地測量部の技術者を中核とし、最初は日清戦争の時に派遣され、以後日本軍の海外での測量に重要な位置を占めた(小林 2011: 97-102, 136-158)。日露戦争に際して派遣された臨時測図部の一部は、第一軍の進撃路に近い地域で活動を続け、できた地図は「假製東亞五万分一圖」と呼ばれたようである(JACAR: C06040404900; C07082420800)。ただしその全体像はよくわか

っておらず、今後の研究が必要である。

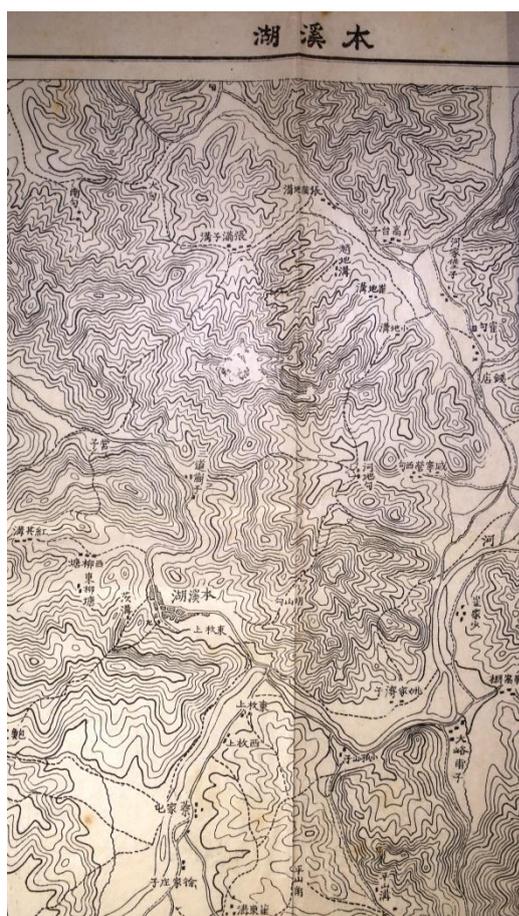


図 2-3：5 万分の 1 第十二師團参謀部測圖「本溪湖」
図幅の中央部分（南下するロシア軍に対し、
本溪湖の谷の北および東をとりかこむ山陵
の争奪で、激戦となった）

第 12 師團参謀部が作製した②は、太子河をやや下った本溪湖付近の図で、全 3 図となる。本溪湖付近ではくり返して戦闘が行われており、戦史で紹介されるのは、なかでも 1904 年 10 月初旬から中旬の戦闘である。沙河会戦に際し、東西に延びた戦線の最右翼を担当した第一軍のなかでも、近衛後備混成旅団（梅澤旅団）がそれから突出して北方（本溪湖の北方地域）に進出してロシア軍の反撃を受け、後退を命じられるが劣勢となり、やはり第一軍所属の第 12 師団の支援を受けて本溪湖の集落の北方や東方の山地稜線をめぐって激戦が行われた（図 2-3）。この近衛後備混成旅団（梅澤旅団）の突出の原因は地図の不備とされる（瀧原 1928: 100-103;

長南 2015: 384-386) 点でも注目される。この 3 図はこの激戦が行われた地域をカバーし、第 12 師団が戦史用に作製したものと考えられる。

ただし、アジア歴史資料センターの公開している近衛後備混成旅団（梅澤旅団）と第 12 師団の戦闘詳報（JACAR: C13110492700; C13110493200~400）に付載されている図（陸地測量部、1904 年 2 月製版と注記）は、この図群とはちがう図で、等高線や地名にちがいが認められる。この戦闘詳報用の図（やはり 5 万分の 1）の元図がいつ頃、どの機関によって作製されたか興味深いだが、それらよりもこの第 12 師団製図の方がややくわしい、という点も付記しておきたい。

なお、上記の地図の不備による近衛後備混成旅団（梅澤旅団）の戦線からの突出に関連して、当時同旅団の進出していた辺牛堡子（辺牛泉堡）の位置を確認すると、すでに紹介した 1904 年 10 月刊の「奉天」図幅（東亞二十万分一圖）では、図郭の南辺より約 15km 北に位置するが、満洲軍總司令部製の 20 万分の 1 奉天図幅（表 1-4 の 12、1905 年 9 月刊）では、それが 20km に達する。このような差が同旅団の突出の原因と考えられるが、その詳細、さらにはその差をもたらした背景については、別稿でくわしく触れたい。今のところ、この部分についてはロシア製図がなく、東亞二十万分一圖の「奉天」図幅では、清国二十万分一圖に記載された付近の主要集落、本溪湖の位置を参照点としたためと考えている。

近衛後備混成旅団（梅澤旅団）による末尾の③は、三つの図を接合するようになっているがその関係は整合的でなく、また周辺に空白域が多い。表 2-3 の末尾に示した三つの図の備考には、第一軍参謀部製の 8 万 4 千分の 1 図を梅澤旅団作製の図によって「補修」と注記されており、この図群が使われたものと考えられる。両者を比較すると、5 万分の 1 図の「其三」は表 2-3 の 18 の「李家台附近補足圖」に、「其二」

は、17Aの「商家台附近補足圖」に対応することが確認できる。なお、「其三」にみえる李家台の集落に近い「尖山」という高まりの両川付近に”523”、”483”と数字がみえるのは標高のようであるが、これがどのように得られたか興味深い。あるいはロシア製図を参照している可能性も考えられる。

3.日露戦争末期の野戦用図

以上、満洲軍総司令部製と第一軍参謀部製の野戦用図を紹介した。これをふまえ、以下関連する留意点について触れておきたい。

まずあきらかなのは、日本軍が日清戦争期以前から蓄積してきたこの地域、とくに奉天以北の地域の地理情報が貧弱で、1880年代の日本軍将校の旅行図(小林編2017)をまだ軸にしなればならなかったという点である。遼陽や海城以南については、日清戦争期の臨時測図部による遼東半島五万分一圖や戦史用の2万分の1図が参照できたが、それ以北になるとそうしたものがなく、したがってロシア製図に頼らざるをえなかった。これが第2の特色となる。

ただし、ロシアがこの地域の地図作製を本格化したのは、義和団事件(北清事変、1900年)以降であり、8万4千分の1図がカバーする地域は、東清鉄道南部支線沿線を軸とする地域と考えられ。それから離れるほど情報が少なくなり、日本側の努力が必要になったとみることができる。この場合、遼陽や海城以南の場合のような、大縮尺図として5万分の1図、小縮尺図として20万分の1図を作製することは容易でなく、ロシア製8万分の1図が入手できる地域については翻訳図を作るとともに、同じ縮尺での測図を行って補足するのが主体となっていたと推測できる。また小縮尺図として20万分の1図がロシア製8万4千分の1図の縮小によって作製されたが、これも東清鉄道南区沿線を離れるに従って容易ではなくなり、日本側の補

足が不可欠になっていったとみてよいであろう。第一軍の作製した20万分の1図、さらに8万4千分の1図に、すでにできていた図を補足するものが多いのは、東西に延びる戦線の最右翼に位置する同軍がカバーすべき地域には、既成の図が少なかったことを反映する。またこうした補足の成果の一部は、満洲軍総司令部製の図にも反映される場合があったことが確認された。

なお、「間諜」からの情報により交通図が作られたのも、こうした状態を少しでも改善するためといえよう。ロシア軍の制圧下にある地域については、日本人の測量要員を派遣することは不可能であり、このような方法を採用するほかはなかった。この種の人びとの養成や派遣、さらには彼らに与えられた指示については、チベットやパミールに「パンディット」をおくりこんだインド測量局(英国)の例が知られている(薬師2006)。「吉林街道以東交通路偵察略圖」や後掲の瀧原三郎の指摘をみると、この地域の「間諜」にも類似の指示が行われたことがうかがえる。

もうひとつ指摘しておかねばならないのは、奉天会戦以後の戦線の北上にともなって、ロシア製の地図の調達が進まなかった場合もあり、その場合は偵察図を作って前進するようなことも一時期行われたことであろう。ただし、そうした地域でも臨時測図部が北上して5万分の1図を作製したことが確認される場合もあり(金2009:31-39)、戦闘には間に合わなかったと考えられるが、地図作製を専門とする組織の役割の大きさもうかがわれる。ただし残念ながら、日露戦争期における臨時測図部の活動については、日清戦争の場合よりも残っている資料が少なく(小林解説2008:89-90,119-122)、また地図の現物を確認するのが困難な場合が多い。表2-4の1~8に示した図については、「陸地測量部仮製東亞五万分一圖」に接続すると注記される場合が多いが、これらの図(「假製東亞五万分一圖」)の探索も今後の課題である。この地域

だけでも全部で 23 図幅に達することがわかるが (JACAR: C07082420800)、まだ現物やその画像に接することができない。

これまでたびたび引用してきた瀧原 (1928: 104) は、本稿で検討した地図作製について、つぎのように述べている。

奉天附近の會戦後全軍が開原東西の線に前進して陣地を構成し平和克復後迄其地に滞在したのであるが其の線より以南は又迅速に一般の測圖が出来た、然れども是より以北の地區は敵の優勢なる騎兵幕ありて遠く測圖地域を伸ばすことが出来ないのである。其れで時には地形偵察且つ測圖の爲め威力偵察の部隊を派遣せしこともあるが中々廣く地圖を取ることは容易でない、已むを得ず總司令部にては支那人の間諜に臨時に略測圖の要領を教へ之を遠く放ちて四平街の敵陣地付近まで測図し大略不完全にして白紙の多き二十萬分の一地圖を補足したしたものである、(後略)

奉天会戦以後の日本軍の直面した地理情報の不足が当事者の立場から示されている。本稿では、威力偵察の例については資料が発見できなかったが、今後注意して探索したい。

以上に加えて、これまで検討してきた多くの図群では、経緯度が示されていないという点に改めて注意を喚起しておきたい。すでに記したように、東亞二十萬分一圖とされる 5 つの図幅では、ロシア側の小縮尺図とはとくに経度のちがいが認められた。ロシア製図の翻訳の過程で、こうしたちがいのほか、図法のちがい、さらに図郭の設定をめくり、日本側がどのような配慮を行ったかについては、ほとんどわかっていない。ただしロシア製図の翻訳に際して、あえて経緯度を省略した背景には、これらが関係したことに疑いの余地がない。また臨時測圖部には経緯度測量班が設置されていたが、この活動についてもわかることが少ないことも関連して触れておきたい。

なお本稿につづいて、本誌本号ではおもに第一軍が作製したと考えられる地図および関係資料を紹介する。本稿の目録が記載するのは、おもに奉天会戦後に作製された、広い意味での地形図を主体とするに対し、この紹介では地形図以外の軍事行動に関する図が多い。奉天会戦期のものも見られ、第一軍の作製した図の広がりを知っていただくためにもご覧いただきたい。

謝辞

本稿のうち第一軍作製図の目録については、その購入時の登録 (2013 年度) の際に当時大阪大学人文地理学教室の学生であった小嶋梓さん (現姓: 多田隈) につくっていただいた目録を参考にした。今回改めて目録を作るにあたっては、再度現物を確認しながら作業を行ったが、たいへんな仕事をお願いしたことをあらためて知ることになった。お名前を著者に加えることも考えたが、その内容に対する責任等を考慮して、謝辞にとどめることとした。記してその努力に感謝したい。

文献

- 金美英 2009. 「日露戦争時の戦場で偵察用に作製・使用されたと推定される地図について」外邦図研究ニューズレター 6: 9-46.
- 小林茂 2011. 『外邦図: 帝国日本のアジア地図』中央公論新社 (中公新書).
- 小林茂 2020. 「中国大陸北部に関する日露戦争初期の日本陸軍之外邦図作製」人文地理学会大会研究発表要旨 22-23.
- 小林茂 2021a. 「日清戦争に際し戦史用に作製された 2 万分の 1 地形図」外邦図研究ニューズレター 12: 71-80.
- 小林茂 2021b. 「日露戦争期に日本陸軍が戦況に応じて編集した野戦用地図とその資料」人文地理学会大会研究発表要旨 60-61.
- 小林茂編 2017. 『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会.

- 小林茂・小嶋梓・多田隈健一・顧立舒 2012.「日清・日露戦争期に臨時測図部が中国大陸で作成した地形図(大阪大学蔵)」外邦図研究ニューズレター9: 59-65.
- 小林茂・渡辺理絵・山近久美子 2017.「中国大陸における初期外邦測量の展開と日清戦争」小林茂編『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会, 76-111.
- 小林解説 2008.『復刻版、外邦測量沿革史草稿、第1冊』不二出版.
- 参謀本部編 1914.『明治三十七八年日露戦史、第十卷』東京偕行社.
- 竹中浩 2011.「東清鉄道の敷設と露清国境」阪大法学 61 (3,4) : 95-116.
- 長南政義 2015.『新史料による日露戦争陸戦史』並木書房.
- 筆者不詳 1902.「満洲東青鉄道南部支線各主要驛の距離」地学雑誌 14(4): 261.
- 藤森衣子・三崎護・中村優稀・鈴江文子・後藤敦史・小林茂 2011.「アメリカ議会図書館、手描き旅順要塞砲台図および5千分の1地形図」外邦図研究ニューズレター8: 23-43.
- 薬師義美 2006.『大ヒマラヤ探検史：インド測量局とその密偵たち』白水社.
- 山近久美子・渡辺理絵・小林茂 2017.「広開土王碑文を将来した酒匂景信の中国大陸における活動」小林茂編『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会, 169-196.